

2023年度

## 第2回 保育講演会



日時 2023年11月7日(火)  
テーマ ~ことばを食べる人たちへ~  
講師 絵本作家 小風さち先生

今回講師としてお招きしたのは、子どもたちに人気の絵本「わにわに」シリーズ作者の小風さち先生です。ひとりの物書きとして、絵本の中で使われている「ことば」や、子どもたちのための話を書くにあたって思い巡らせてきたことを、ご自身の作品の読み聞かせを交えてお話しいただきました。

参加者 34名

### 講師紹介 小風さち先生

1955年東京生まれ。1977年から87年までイギリスで暮らす。著書に、『わにわにのおふろ』など「わにわに」シリーズ、『とべ!ちいさいプロペラき』『はしれ、きかんしゃちからあし』、『こぶたのピクルス』シリーズ、『よ・だ・れ』(以上、福音館書店)、翻訳作品に、『おおきな3びき ゆうえんちへいく』、『せかいいちのあかちゃん』(ともに、徳間書店)、『みっつのねがいごと』(岩波書店)などがある。

1994年野間児童文芸新人賞受賞。

(絵本ナビの紹介より)

### 「ことば」を食べてもらうための本づくり

言葉とは赤ちゃんにとって理解するものではなく、まるで形があるもののように触れて遊んで最後には食べていくものです。声音から雰囲気を感じとり、言葉を食べることで心や体に取り入れて自分の一部にしていきます。

子どもとは面白いほどにたくさんの言葉を食べるものです。

赤ちゃん向けの本を作るときは、小さな手にもあう大きさにする、角を丸くする、舐めても無害なインクを使用するなど、言葉だけではなく形も大切にしています。複雑な絵や大きな画面に焦点を当てるのも苦手なので、はっきりとしたシンプルな輪郭と優しく美しい色彩、気持ちの良い構図になるように心がけています。

また、母親と子どもは絵本を読むだけではなく、言葉を繰り返したり絵を指さしたりしながら会話をしています。母親の手にかかれば、あっという間の短い絵本も、とりとめのない長い話に変身します。

その会話で大切なものが余白です。絵に余白があるように、言葉にも句読点や改行の位置などで余白を作り、ゆったりと会話ができるように工夫をしています。

心にも体にも良いものを食べさせてあげたいと思う母親と同じように、子どもたちに良いものを作って本を作る、それが物書きとしての仕事です。

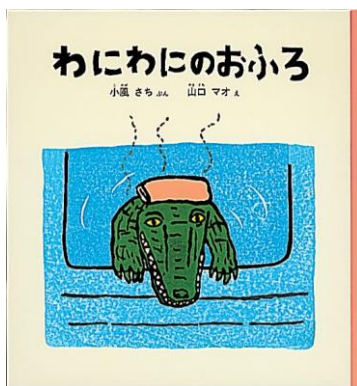
## 赤ちゃんの絵本には不必要なものはなるべくないほうがいい



赤ちゃん向け絵本『ぶーん!』

この絵本は、「飛行機」を題材に「脇阪克二さんの絵」で作ることが決まっていた。飛行機がよく見える滑走路横の公園を訪れると、小さな木の枝を飛行機に見立てて夢中で遊ぶ男の子がいました。小枝は男の子に命を吹き込まれ、本物のジェット機となり空を飛んでいます。そして、その小枝のジェット機は、間違いなく男の子自身でもありました。小さい人たちは、すぐに色々なものになりきれ魔法のスイッチを持っているのです。この目で何を見たら、この手で何に触れたらあの自由闊達な心に届く話ができるのか。どんな響きの言葉で、リズムで、展開で語りかけたらよいか……。途方に暮れ初めて気づいたのは、音を音のまま写し取って自分の言葉として素直に差し出すことの大切さです。そして、赤い車体と灰色のタイヤだけで郵便車とわかる、極めてシンプルなイラストの描かれた脇阪克二さんからの絵葉書を見て、「赤ちゃんに届く絵はこれだ」と直感しました。言葉にも絵にも不必要なものはいらないと考えを改めてできたのが、この『ぶーん!』です。同じ言葉の繰り返しとシンプルな絵、ありきたりな内容で「これだけ?」と思われるかもしれませんが、でも、どんなに工夫を凝らしたごちそうよりも毎日のありきたりな食事こそが大切なのです。それは本にもいえることで、赤ちゃんの耳が喜ぶ言葉やリズム、目に美しくてわかりやすい絵、何よりも読んでくれる人のためになることが大切なのです。

## 物語は偶然の要素が重なり合ってずっと降りてくる



年少向け絵本『わにわにのおふろ』

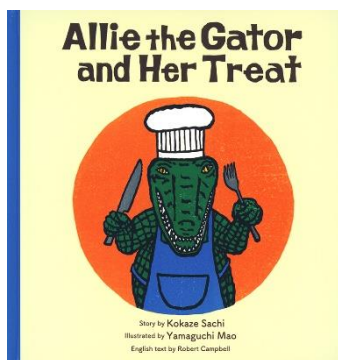
ワニについて考えるようになったきっかけは、「東京の公園にワニが出た!」という騒ぎと、「伊豆のバナナワニ園でワニの引越しがある」というニュースが同時期にあったことです。実際にバナナワニ園に足を運び、たくさんのワニを見て、飼育員さんに話を聞くことで、物語に必要な情報をいろいろと仕入れることができました。例えば、生まれたてのワニは赤いこと。実際に保育器のようなものの中でカシャカシャ動く小さな赤いワニを見せてもらいました。そのメガネカイマンの赤ちゃんが「あかわに」のモデルです。主人公の「わにわに」は、たくさんいたワニの中からミシシッピワニがモデルになりました。そして聞こえてきたのが「ずりずり……」というワニが床を這って歩く音や、「きゅりきゅり」と蛇口をひねる音。これは話が自ら生まれようとしている音でした。話が自分から生まれたいと訴えて、生まれてこようとするときに、物書きはそれをただハイハイとそのまま書くだけの媒体となります。物書きにとって、一番充実した幸せを感じることができる瞬間です。こうして生まれたのが、『わにわにのおふろ』でした。

## リアルとリアリティの違い

ありえない場所にありえない生き物がいて、お風呂に入ったり、洗面器をかぶったり、歌を歌ったりして遊ぶ。ありえないことだらけの世界に違和感を感じないで受け入れてもらうためには、リアリティを感じてもらうことが重要になります。そのためには、まず自分が物語の中に入って見聞きしたことを言葉にしていきます。もちろん、そこに登場するワニは実際のワニでなくてはいけません。また、デフォルメされたりしていないワニがワニとして描かれた絵も必要です。先にできあがった文章のワニをイメージ通りに描いてくれたのが、木版画家の山口マオさんでした。ワニが不気味な音を立てながら普通の家で暮らしているという、絶対にありえないけれど不思議ではない世界は、このようにリアリティをもたせることで成立できたのです。

一つの世界を無から構築していくとき、絶対的なリアルが必要なわけではありません。でも、そこにリアリティがなければ、子どもは本を閉じてしまいます。本はひとたび閉じられてしまえば、中から何を叫んでも無駄でしかありません。それほどに子どもにとって未知の世界に足を踏み入れていこうとするときに、リアリティは重要な足がかりになるのです。そのリアリティは、必ず現場に足を運ぶこと、目で見ること、耳で聞くこと、その時間を必要なだけ積み重ねていくことで生まれます。表現の上手い下手ではなく、見るということを忘れた造形(=本)からはリアリティがどんどん失われてしまいます。

## 母国語での読み聞かせ ～ オノマトペへの挑戦 ～



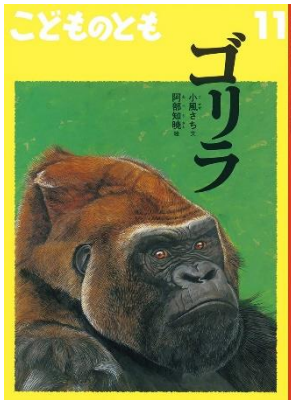
英語版『わにわにのごちそう』

ロンドンで二人の子どもを出産し、育児をしていたとき、日本語を礎にしたいと思っていました。子どもたちには日本語の本を日本語で、方言があればその方言で読んであげたかったのです。同じように、日本にいて母国語の英語で本を読んであげたいと思っているお母さんがいるかもしれないと思い、英語版の本を作りました。

子どもの絵本は言葉の数が限定されていて、それに絵が添えられています。説明ではなく、直接子どもの頭と心に響いて届くという言葉であるということ、絵と共振するものとして絵本の言葉は表現としては非常に面白く魅力的です。

英訳するとき、特に大変なのはオノマトペ。日本語には擬音語・擬態語がたくさんあり、子どもにとっては読む人の声を通して感情を動かされたり、言葉のリズムを楽しんだりすることのできるとても大事なものです。日本語のリズムをできるだけ英語でも追体験できるようにしたいと思いました。けれど、それを訳すのは苦行でした。面白かったけどね！

## わたしはゴリラ。きみはにんげんだね？



年中向け絵本『ゴリラ』

製作期間 20 年！絵は日本画を専門とされている阿部知暁さんです。阿部さんの本気で描かれたゴリラの絵を見て、全 6 か所の動物園、そしてアフリカにも 2 度ゴリラを見に行きました。動物園では、「ゴリラ」だけでなくゴリラを見に来ている子どもや先生との出会いを見るのが大切です。子どもは「ゴリラは近いもの」と本能的に感じ、ゴリラもやぶさかではない様子を見て「わたしはゴリラ。きみはにんげんだね？」というフレーズからはじまるなと思いました。また、絵本の表紙に使われている濃い緑色はアフリカの熱帯雨林の色、黄色はアフリカの国旗の色を表しています。

## 子どもに本を読むということ

子どもに絵本を読むということは、自分の肉体を通してことばを再生し、直にこどもの心や魂、精神に入っていくということです。いかに言葉が相手の心にすみつくことを知っているから、子どもにお話を書く者は、丁寧に思いやりをもってことばをつむぎたいと思っています。

絵本は作家、絵描き、編集者だけでなく、読み手がいなければ、なに一つ完結しないと思いがら書いています。

## 小風さち先生の作品



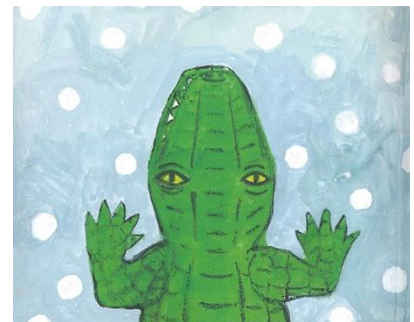
年長向け

『とべ！ちいさいプロペラき』



年長向け

『とべ！ちいさいプロペラき』



製本段階の新作!!

『わにわにとおおゆき』

こどものとも年小版

などなどその他にも多数あります！！

文責 広報委員 一柳 巧 野口真奈美 毛利亜矢子 山下美由紀(ゆり組)  
藤井美由紀(スイトピー組)



## 参加された方より

スイトピー・ゆり組 井川 愛

小風先生を一目見た時から、その可愛らしい雰囲気魅了されました！講演会が始まると、優しい声もとても心地良く私の耳に入ってきました。小風先生のお話の中に、絵本を読みながら、お母さんと子供は会話をする、その為の余白が大切というお話があり、絵本を読むことのとても大事な意味を私自身忘れていたことに気が付きました。私は毎日、子供を早く寝かせる為に、ただ絵本を読むだけになっていました。講演会の中で、小風先生が絵本を読んで下さった時、とても心がこもっていて、聞いていると心穏やかになっていく自分がいて、物語に聞き入ってしまう、これが読み聞かせだったということ、気づかせていただきました。このことを分かってから、毎晩子供たちと絵本を読むことを楽しんでます。自分たちで本を読むようになって、絵本を読まなくてもいい時期が必ずきてしまうので、それまでたくさん心をこめて、会話をしながら子供たちと絵本の世界に浸りたいと思っています。大切なことに気づかせて下さりありがとうございます。

スイトピー組 山田 千夏

息子が赤ちゃんの頃に小風さち先生の絵本を読みきかせていました。先生の言葉はやさしくて、リズムがあり、読みきかせている私も温かい気持ちになれた事を思い出しました。言葉と絵に余白を持つ事を大切にしていると仰っていた通り、先生の絵本を読みきかせている時は言葉と言葉の間で息子と笑い合ったり、お話しをしたりする時間がありました。大切な温かな時間だったなあと思います。ことばの音色、やさしさ、リズムなどと余白を大切に、できるだけ長く読みきかせを楽しめたらいいなと思います。ゆったりと楽しい講演をありがとうございました。

スイトピー組保護者

この度は貴重な講演会ありがとうございました。さち先生の穏やかなお人柄ながら、絵本作家としての優しく強い思いが伝わる素敵な講演会でした。絵本を見る子供たち、読み聞かせる親のことをとても丁寧に考え、何年もかけて研究されて言葉につむぎ、一冊の本を作られていることが分かり大変感動致しました。先生がお話されていたように、赤ちゃんの頃に読み聞かせていた絵本は言葉がとてもシンプルで、その分、絵を見ながら色々想像をして語りかけていたことを思い出しました。今は文章が長い絵本を読むようになり、読むことに集中してしまっていたように思います。講演会の日の夜は、早速購入した絵本をこどもと一緒に読みました。普段より丁寧に1ページ毎に対話をしながら読むと、こどもも嬉しそうでいつも以上に楽しい時間になりました。今の気持ちを忘れずに、まだ読み聞かせを楽しみにしてくれているこの時期を大切に過ごしたいと思います。

ゆり組 毛利亜矢子

とても貴重なお話をありがとうございました。小風先生が絵本を作られるまでのリアリティーを求められている姿勢が素敵に思いました。中学生の頃に物語を書いてみたことがあったのですが、なんだかありきたりですと腑に落ちない感覚がありました。その理由がわかった気がしてとてもすっきりしました。実際に経験することの大切さを改めて感じました。また、本に綴ったことばが読む人の心に染み込んでいくという感覚も納得しました。ちょうど小学生の娘が授業で絵本作りをしているので、実物を自分の感覚で感じてから書いてみることやことば選びをアドバイスしてみようと思います。

スイトピー保護者

子どもというのは、本当に絵本の読み聞かせが好きですね。うちの子ももれなく大好きです。時々絵本を持ってきて、コレ読んで！と言ってきます。講演会で「言葉は音に変わり、身体（心、魂、精神）に入っていく、一生住み着く」と聞いた時、以前長男から、ママの読み方は声に強弱を持たせたり、登場人物毎にセリフの声を変えたりするので好きだと言ってくれたことを思い出しました。感情を込めて話すのは、時々読み手が泣きそうになることがあって大変な時もありますが、自分なりの楽しみ方で読み、もっと子どもたちと一緒にゆったりとした時間を共有していけたらと思いました。

今まで小風さち先生の絵本にはあまり馴染みがなかったのですが、ご自身で朗読してくださった絵本や会場に置いてくださった絵本はどれも、子どもに読んであげて、子どもと一緒に自分も楽しみたいと思う絵本ばかりでした。

小風先生の絵本を子どもに読み聞かせていると、言葉のリズムが心地よく、無理なく口からすっと出て音になる気がします。子どももその言葉が好きなのか、講演会後から小風先生の絵本ばかり「これ読んで」と持ってきます。

こうした先生の絵本の魅力は、絵本を作るにあたっては実際に自分で足を運び経験することが大事というストイックな信条によるものなのかも知れません。

そんな物書きとしての厳しさも垣間見せてくださった先生は、お茶目でチャーミングな貴婦人という佇まいでおられ、和やかな講演会でした。

この度は、貴重な機会をいただきどうもありがとうございました。

絵本作りで心掛けていらっしゃる点は子ども達への配慮と思いやりに満ち溢れていたり読者の皆さんに一番お伝えしたい事として述べられた「作家やイラストレーター出版社がいても作品は仕上がらない、読み手の子どもやお母さん先生方がいらっしゃる事で完成する」という謙虚な姿勢も素敵で、本屋さんで先生の作品が人気作家コーナーにあるのも凄く領けました。率直に是非これからも先生の作品を読み続けたいです。

さて先生が思わず抱きしめられた、あの茶封筒に入った阿部さんの本気の絵。純粹にこれは子ども達に見せたいという一心から20年もの歳月を費やされた作品にどんな反応を示すのかなど、どきどきわくわくしながら年中の娘に読み始めるなんと‘ゴリラ’の語りかけ一語一句に返答をしたんです！これは正しく先生や阿部さんのイラスト出版社の皆さんの思いの丈が見事に子どもの心・魂・精神に届いた瞬間なのだと確信しました。お話しを伺った後だったので伝わった事でなんだか報われた気がしてとても温かく嬉しい気持ちになりました。

そして先生が大切にされていた‘余白’ 亜樹子先生が例えられた物事の背景を知ろうとする余白・気持ちの余裕については、子どもとの向き合い方一つで親子の関係性にも大きな影響を与えるものと改めて考えさせられそんな余白を大切にしていきたいなと感じました。

いつまで読み聞かせをしたらいいかの質問に「子どもが求めればいつまでも。その内に子どもに逃げられてしまうから笑」と子育てされた先輩お母さんとしての言葉には説得力と重みがありました。きっとその内は想像しているよりもずっと早い気がするので読んでとせがんでくれる今を大事に味わいたいなと思えました。

早速、先生のお好きな絵本の1つとして答えてくださった、ゆきちゃんのせかいりょこうで冒険したいです。この時、瞳を輝かせて本当に大好きだったのと仰っていた姿が非常にチャーミングで印象的でした。お陰様で娘も将来こんな風に言える作品を探して本棚と一緒に埋めていく楽しみが出来ました。

この度は先生自らによる読み聞かせ、穏やかで柔らかいお声が本当に聞き心地良かったです。貴重で贅沢なお時間をありがとうございました。

講演会のテーマ「ことばを食べる人たちへ」と見たとき、いったいどんな内容なのだろうと楽しみにになりました。いつもたくさん読んでいる絵本、でもその絵本の作家さんのお話を実際にあって聞くことはなかなかできません。私にとって野毛山幼稚園の講演会はいつも身近な、それである貴重なお話を聞くことができるいい機会になっています。いつもありがとうございます。今回の小風先生のお話の『余白』を大切にされている。絵本を読むときに母親と子供が会話している。そんな話がとても印象的でした。

小学二年生の兄もまだ、毎晩の絵本の読み聞かせの時間になると漫画を読んでもその本を置いて絵本を見に寄ってきます。講演の後、余白を意識しながら絵本を読んでも、息子たちが絵本の中に色々なものを見つけ感じ、考えながら聞いていることに気がつきました。

小風先生のリアリティのある絵本だからこそ、子どもも、私たち大人も引き込まれ楽しい時間を過ごすことができているのだと感じます。文字通り、ことばを食べる人たちへ私たち母親は絵本を読んでいるんだなと実感しました。今回も素晴らしい時間を過ごせたことに感謝いたします。ありがとうございます。

スイトピー組 藤井美由紀

豪快な食べっぷりにグラグラと笑い、「野菜残してる!」「こぼしてる!」「倒したまんま!」「冷蔵庫開けっ放し!」と、楽しそうに突っ込む息子たちは、「わにわにのごちそう」がとくにお気に入り。まるで息子たちの日常を描いているようで、いつもの調子で注意したくなってしまうはずなのに、なぜか私までクスッと笑ってしまう。

そして、年長の二男の最近のお気に入り「こぶたのピクルス」。楽しくなってつい調子に乗って失敗してしまうことがある二男は、ちょっとおっちょこちょいなピクルスを、「ぼくみたい!」と、まんざらでもない様子。

インパクトある一見怖そうなわにわにと、ほのぼのと愛らしいピクルスの見た目は正反対のキャラクターなのに、どちらも親しみを感じ、読み終えた時に温かい気持ちになるのはなぜだろうと思っていましたが、小風さち先生にお会いして、その理由がわかったような気がしました。

先生の絵本に出会ったのは5年前で、当時2歳だった乗り物好きな長男に、「とべ!ちいさなプロペラき」を読んであげたところ、長男のお気に入りとなり、今まで何度も読むことができました。

絵本の一節、「げんきをおだし、プロペラくん。ひろいそらでは、ぼくらのおおききのことなどわすれてしまうよ」私の心に響いた言葉でもあり、これから先、さまざまな場面で子どもに寄り添い励ましてくれるメッセージとして、子どもが成長してもそばにおいておきたい1冊です。

ご講演では、それぞれのお話しができるまでのエピソードはとても興味深く、ちょうど今夏に熱川バナナワニ園に行っていたので、ワニの迫力に圧倒されたことを思い出しながら拝聴しておりました。そして、先生の読み聞かせはとても穏やかで心地よく幸せな時間でした。

毎日当たり前のように子どもに読み聞かせをしていますが、長い人生の中で、子どもに絵本を読んであげられる期間はそう長くはなく、子どもと一緒に絵本を楽しめる今を、これからも大切にしたいと思いました。この度はとても素敵な時間をありがとうございました。

ゆり組保護者

講演に参加するまでは、絵本の作家さんのほのぼのした会なのかなと思っていました。

実際、登壇された小風先生の佇まいや話し方は、穏やかな春の陽だまりのようでした。

ただ、心に響いてきたものは、優しさの中に凛として存在する作家、芸術家の生き様が見えてくるようで、私にはスリリングな体験でもありました。

『余白を持たせる』

文章を書くときに全て書き出し、消し、また書き、作家の存在を消していくという。

芸術家の凄みを感じるとともに、自分を超えていくものを手放すという潔さを垣間見たようにも思いました。

いつか子供は親を超えていきます。

親が余白を言葉で埋め尽くし、子ども自ら気付いていく事、自分の中に言葉が熟して育っていくその過程を奪ってはいけないと思いました。

子供と共にいられる限られた時間をどう過ごしたいのか。大切にしたい大きな問いをもらったような講演会でした。

ありがとうございました。

ゆり組 石井 舞

素敵な講演会をありがとうございました。

ふだんなにげなく手にしている絵本でしたが、それができていく様子を聞いて、たくさん時間と苦労があるのだとわかりました。絵本を読む時間、それは赤ちゃんの頃は無限にあったように思えましたが、最近では朝起きて幼稚園に行くまでの間か、寝る間際かでいつも要望の冊数を少し急ぎめに読んでいました。「言葉を食べて生きる」今回のテーマを学んだことで、もっと大切に丁寧に言葉を発し語りかけていきたいと思えました。講演会から幾日かが経ち、言葉の重みを感じ丁寧に読み聞かせることを実践してみました。絵本を通じて娘とわたしが温かい気持ちになれたことをわたしは感じています。貴重なお話の機会をありがとうございました。いつまでもできるわけではない読み聞かせの時間をもっと幸せを感じ楽しみたいと思います。

小風さち先生はとてもチャームングで、ふんわりと優しい温かい空気感の中に一本潔い芯の通った様がすごくかっこよくて、こんな風に素敵に歳を重ねられたらなあど憧れてしまう…そんなお方でした。

言葉は、ひとの体を通して「音」になる。その「音」が、別の人の魂に入っていく、その人の人生と共に生きつづける。

だからこそ、読者のこども達はもとより、読み聴かせてくれる人達がとても大切なのだとおっしゃっていた小風先生。

息子にとって番付一番の読み手として、どんな「音色」で物語を届けるのか…

わたしに託してもらったその役割を、これからもいろんな角度から楽しみながら探求していけたらいいなと思います。

購入させていただいた絵本に先生のサインをお願いする長蛇の列！

対応くださるそのお姿にもお人柄がとてもにじんでいて、ひとりひとりのママ達と至極丁寧に向き合ってくださいだったのがごく印象的でした。

「宛名は、“はあとくんへ” お願いします！」とお伝えすると、「まあ…付けちゃったの…！」と呟いたのち、わたしのお顔をとっくり見つめてくださり「一番たいせつなものね」

とおっしゃってくれた小風先生。

いつか息子が大きくなった時、先生のサイン本と一緒に読みながら、交わさせてもらったこの会話をとびっきりの得意顔で聴かせてあげたいなと思います！

小風先生、心の満ちるたくさんのお話を本当にありがとうございました。

